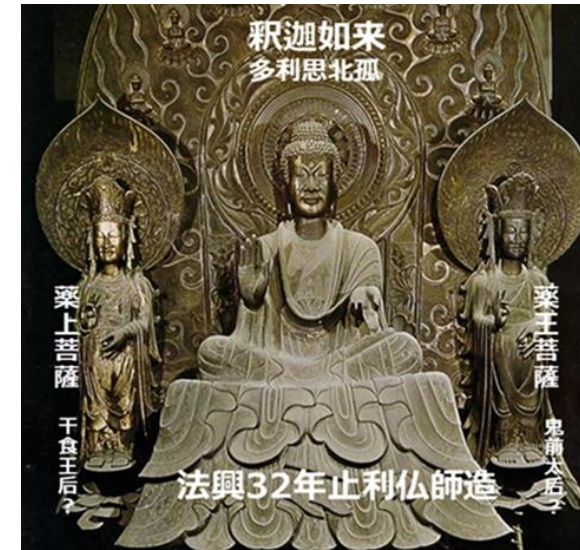


「聖徳太子」は天然痘で薨去した —倭国の対外戦争と疫病—

- 1、遥か古代から繰り返し人類を襲った「天然痘」
- 2、天平時代我が国を襲った「天然痘」= 大和朝廷を揺るがす
- 3、欽明・敏達・用明期に「天然痘」が大流行
- 4、「天然痘」流行前に九州の勢力の高句麗出兵があった
- 5、「聖徳太子」は天然痘の大流行の中で誕生した
- 6、大和朝廷の「大宝建元」以前に存在した「九州年号」
- 7、後の世に「聖徳太子」とされたのは誰か
- ①九州の多利思北孤は我が国の代表者で全土を統治
- ②法隆寺釈迦三尊像の「上宮法皇」も「多利思北孤」
- ③法隆寺釈迦三尊像の光背銘文
- ④「鬼前太后・干食王后」は「天然痘の苦役」を表す
- ⑤「多利思北孤の崩御・鬼前太后・干食王后」と天然痘
- 8、天然痘は我が国の古代史を大きく変えた

『書紀』敏達14年（585）3月。又瘡発でて死（みまか）る者、国に充盈（み）てり。其の瘡を患む者言はく、『身、焼かれ、打たれ、摧（くだ）かれるが如し』といひて、啼泣（いさ）ちつつ死る。



法隆寺釈迦
三尊像推古
31年・仁王元
年（623）止
利仏師）

東大寺盧舎
那仏像
天平17～24年
（745～752）



遙か古代から繰り返し人類を襲った「天然痘」

天然痘は紀元前数千年から人類を脅かしていた

* コロナ6億7千万人が罹患1500万人死亡 (WHO)

「天然痘」は「疱瘡（ほうそう）」とも呼ばれ、高熱を発し、強い疼痛や灼熱感を伴い、20～50%の高い致死率を示す。また死に至らずとも顔、体に重篤な痘跡（あばた）を残した。

1796年5月14日英国のジェンナーが、予防のために種痘を始める前までは、世界中で常に発生・流行し、毎年約2000万人が罹患し、約400万人程度が死亡する恐ろしい病気だった。

最も古い天然痘の記録はBC1350年のヒッタイトとエジプトの戦争に際するもの。エジプトの囚人達が天然痘をヒッタイト人に広めヒッタイト王シュッピルリウマ1世・息子のアルヌワンダ2世の命を奪った。（シュッピルリウマの年代記） また、BC1100年代に没したエジプト王朝のラムセス5世（～BC1141）のミイラに天然痘の痘痕（水痘説も）が認められている。 BC430年の「アテナイの疫病」や、AD165年～180年の間にローマ帝国を襲った「アントニヌスの疫病」も天然痘とされ、少なくとも合計350万人が死亡。



天然痘は中東から西域を経由して5世紀末に中国へ、半島には6世紀前半に伝播

中国では、476年に西域から伝わり、南朝「齊」には495年北魏と交戦して流入し流行したとするのが最初で、6世紀前半には南北朝それぞれから冊封を受けていた高句麗を通じ朝鮮半島でも流行する。

「比の歳（500？）に、病時行（はや）ること有り。仍ち瘡（かさ）、頭面より發（いで）て身に及びて、須臾（すみやか）に周匝（めぐ）る。その状は火瘡（やけど）のごとく、皆白漿を戴（さきよりいだ）し、隨決隨生（なりゆき）にまかせ、不即治（なおら）ねば、劇（はなはだ）しく多く死す。治得瘡（なおり）て後、瘡癥（はんろう・きずあと）紫黒く、減ずるに彌歳（ながねん）を方す。この惡毒の氣世人云ふに元徽四年（476）此の瘡西より東に流（つた）はる。（略）建武中（494～497）に南陽を撃ちし虜より所得（え）る、仍ち虜瘡（りよはん）と呼ぶ。（『肘後備急方』（ちゅうごびきゅうほう） * 晋の葛洪著を南北朝齊の陶弘景（456～536）が改訂

比歲有病時行仍發瘡頭面及身須臾周匝狀如火瘡皆戴白漿隨決隨生不即治劇者多死治得瘡後瘡癥紫黒彌歲方減此惡毒之氣世人云永徽四年此瘡從西東流徧於海中煮葵菜以蒜薑啖之即止初患急食之少飯下藥亦得以建武中於南陽擊虜所得仍呼爲虜瘡諸醫察詳作治用之有效方

取好蜜通身上摩亦可以蜜煎升麻并數敷食又方以水濃煮升麻綿沾洗之苦酒漬彌好但痛難忍其餘治猶依舊法但每多作毒意防之用地黃黑膏亦好治時行病發黃方茵陳六兩大黃二兩梔子十二枚以水一斗先煮茵陳取五升去滓內二物又煮取二升分四服亦可兼取黃疸中雜治法差

天平時代我が国を襲った「天然痘」＝大和朝廷を揺るがす

朝日2020
年6月10
日夕刊

天然痘の脅威 平城京にも猛威

藤原麻呂の邸宅から捨てられたとみられる油の利用帳簿の木簡。裏に「此物能
量著患道者吾成明公莫憑必退山陽道」と記されている。奈良文化財研究所提供



平城宮跡に復元された大極殿＝奈良市

天平文化と呼ばれる貴族・
仏教文化が花開いた奈良時
代。天平9（737）年に大
流行した天然痘では、人口の
約3割が命を落としたとされ
る。
奈良時代の基本史料「続
日本紀」によると、天平7
（735）年に九州で発生し
た疫病は、その後全国で流
行。一度は下火になったが、



「たたり」と恐れ 木簡に記した祈り

737年の春になると再び九
州から流行が始まり、夏から
秋にかけて都の平城京をはじ
め、全国で猛威を振るった。
「古代に疫病は何度も流行
していますが、この時は中世
ヨーロッパ社会を変えたペス
トの大流行のような、空前の
大惨事だったと言えます」。
京大大学院の吉川真司教授
（日本古代史）は話す。
全国で死者100万人超
奈良時代前半の全国の総人
口は約450万人。正倉院文
書に残る諸国の正税帳（財政
報告書）から死亡者の比率が
推計できるという。和泉国
（現在の大阪府南部）で人口
の45%が亡くなるなど、全国
で100万～150万人が死
亡したとされる。
国は全国の国司に向け、症
状を説明し、生魚や生野菜を
食べることを避けたり体を温
めたりなど、対処の仕方を細
かく記した指令書を出してい
る。渡辺晃宏・奈良大教授
（日本古代史）は「このほか
にも租税の免除や、8度にわ
たる食糧の無料配布、大赦な
ど、当時としては考えうる限

りの手厚い施策をとっている
ことがわかる」と指摘する。
だが、被害は都の貴族たち
にもおよび、政権中枢にいた
る藤原氏の四兄弟（武智麻呂、
房前、宇合、麻呂）ら、33人
いたとみられる四位以上の貴
族のうち、11人が死去。朝廷
は機能不全に陥った。
流行の原因は、朝鮮半島の
新羅から訪れた使節が運んだ
とも、遣唐使が持ち帰ったと
もいわれる。だが、ウイルス
への知識はなく、医療体制も
脆弱な時代。当時の人々は、
疫病を疫病神や鬼神のしわざ
と考え、鎮めようとした。
平城京では、道路の側溝や
運河の跡などから、疫病神や
鬼神の顔を土器に描いた「人
面墨書土器」が数多く出土す
る。まつりをして水に流し、
疫病を都から追い払おうとし
たらしい。
一方で、疫病の原因の一つ
は、神亀8（729）年に無
実の罪で藤原四兄弟に陥れら
れ、自殺に追い込まれた皇族
の有力政治家、長屋王の怨霊
によるたたりとも考えられて
いたようだ。
平城京で出土した木簡に、
藤原麻呂の邸宅から捨てられ
たとみられる天平8（736）
年ごろの油の利用帳簿があ
る。その裏に天地を逆さまに
して記された文字があり、正
確には解読不能だが、麻呂の
家来が「疫病がご主人様を襲
う」と訴えている（渡義人）

政治の中心が皇族へ
疫病がおさまった後、聖武
天皇は、藤原四兄弟を中心と
した政治から、皇族中心の政
治へと転換。荒廃した土地を
再開墾するべく、開墾地の永
久私有を認めた「墾田永年私
財法」を発布するなど社会
復興策を手がけていく。仏教
への傾倒も強め、疫病や飢饉
などに苦しむ人々が救われる
ことを願い、東大寺に大仏が
建立される。

吉川さんは言う。「疫病を
経験した後は、社会の仕組
みは大きく変わってきた。疫
病はただの歴史の一コマでは
なく、政治や文化などに大き
な影響を与えてきたことを、
今の私たちがも知っておく必要
がある」

わが国の8世紀の天然痘の大流行は九州・太宰府発

天平7年（735）8月乙未（12日）に、敕（みことのり）して曰
はく、「如聞（きくならく）『比日（このころ）、大宰府に疫（えやみ）して、死
ぬる者多し。』ときく。疫氣（えきき）を救い療（いや）して、以て民の
命を濟（すく）はむと思欲（おも）ふ」とのたまふ。（救済策略）又、
其の長門より以還（このかた）の諸国の守、若くは介、専ら齋戒し、
道饗祭（みちあへのまつり）を祀れ。丙午（23日）に、大宰府言さく、
「管内の諸国に、疫瘡（えきさふ）大きに発（おこ）り、百姓悉く臥
しぬ。今年の間、貢調を停めまく欲す」とまうす。これを許す。

直前の2月～8月に唐・半島・九州との交流があった

◆天平7年（735）2月癸卯（17日）に、新羅の使金相貞等、入京。
3月、丙寅（10日）入唐大使多治比真人廣成等、唐国自り至る。
5月庚申（5日）。入唐廻使（にっとうかいし）及び唐人、唐国・新羅の樂
を奏して持槍（ほこと）る。壬戌（7日）に、入唐使、請益秦大麻呂が問
答六卷を献る。戊寅（23日）。「迺者（このところ）、災異頻（しき）りに興
（おこ）りて、咎徴（きうちよう）仍（な）ほ見（あらわ）る。戦々恐々として、責
め予（われ）に在り。」秋7月己卯（26日）に、大隅、薩摩二国の隼人
二百九十六人、入朝し、調物（みつきもの）を貢（たてまつ）る。
8月辛卯（8日）に、天皇、大極殿に御す。大隅、薩摩二国の隼人等、
方楽を奏る。壬辰（9日）に、二国の隼人三百八十二人に爵并せて祿
を賜ふこと、各差（しな）有り。

天平時代わが国を襲った「天然痘」＝大和朝廷を揺るがす

天然痘は大和に伝播し朝廷の高位高官が続々と死去

天平7年（735）、新田部親王（天武の第7子）・正四位上賀茂朝臣比賣（聖武の外祖父）・**舍人親王**（天武の第3子）・従四位下高田王らが薨るなど**四位（長官級）以上33人中11人が死去。**

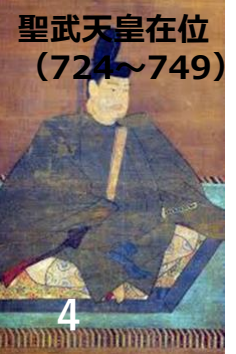
天平9年、ついに藤原4兄弟天然痘に斃れる

- ①天平9年（737）4月。**藤原房前（不比等の第2子）死す：**参議民部卿正三位藤原朝臣房前薨（みまか）る。送るに大臣の葬儀を以てせむを、其の家、固く辞（いな）びて受けず。19日、大宰管内の諸国、疫瘡（えきさう）時行（はや）りて、百姓多く死ぬ。
- ②同6月。**藤原麻呂（不比等の第4子）死す：**甲辰の朔、朝を廃む。**百官の官人疫（やまひ）に患（わずら）へる**を以てなり。（散位従四位下大宅大国・大宰大貳従四位下小野朝臣老・散位正四位下長田王・中納言正三位多治比真人縣守・散位従四位下大野王・参議兵部卿従三位藤原朝臣麻呂・散位従四位下百濟王郎虞が次々薨る。）
- ③同7月。**右大臣藤原武智麻呂（不比等の第1子）死す。**
- ④同8月。参議式部卿兼大宰帥**正三位藤原朝臣宇合（不比等の第3子）死す。**

天然痘は8世紀我が国の政治を大きく変えた

藤原家中心政治から皇室中心へ

藤原4兄弟の死は、729年兄弟により死に追いこまれた天武の孫で高市皇子の長男「長屋王」の祟りとされた。聖武天皇はこれを恐れ、長屋王一族の復権と鎮魂に努める。4兄弟没後、長屋王の実弟である鈴鹿王を知太政官事に任じる一方、天平12年（740）に藤原宇合の長男藤原広嗣の乱が鎮圧され、藤原一族は衰退する。（広嗣は死罪、藤原宿奈麻呂・藤原田麻呂・藤原綱手は各流罪）疫病退散と祟りを逃れるため仏教崇拝を強め、741年国分寺建立の詔、743年墾田永年私財法・**東大寺盧舎那仏像造立を詔発。**



欽明 (在位539～571) ・敏達 (572～585) ・用明 (586～587) 期に「天然痘」が大流行

わが国では6世紀後半に「天然痘」が猖獗を極めていた

◆『書紀』敏達14年 (585) 2月辛亥 (24日) 蘇我大臣 (馬子) 患疾 (やまひ) す。(※ト部の「父稻目の祭った仏神の心の祟り」との占状をうけ敏達「亡父稻目の神を祀れ」と詔を発する。馬子は石仏を造り崇拝する) **是の時に、国に疫疾行 (えやみおこ) りて、民死ぬる者衆 (おほ) し。**

3月。物部守屋は「**欽明～敏達まで疫疾が流行**するのは蘇我氏の神 (仏教) による」と奏上、敏達は「仏教をやめよ」と詔を発す。守屋は仏像・仏典を焼き、難波の堀江に捨て、尼を捉え罰するなどの廃仏をおこなう。しかし敏達と守屋も天然痘に罹患。

◆敏達と守屋と卒 (にはか) に瘡 (かさ) 患みたまふ。・・**又瘡 (かさ) 発でて死 (みまか) る者、国に充盈 (み) たり。其の瘡を患む者言はく、『身、焼かれ、打たれ、摧 (くだ) かれるが如し』**といひて、啼泣 (いさ) ちつつ死る (※天然痘の症状)。老少窃に相語りて曰さく「これ、仏像焼きまつる罪か」といふ。・・(敏達は馬子1人に仏教崇拝を許すが) ・・8月己亥 (15日) 敏達崩御。

◆敏達に続き用明も587年4月2日に天然痘に罹患、「三宝に帰依」し回復を願うも9日に崩御する。



守屋の「欽明～敏達まで」との言と、次の欽明13年記事から6世紀半ばからずっと天然痘が流行していたことがわかる。

◆欽明13年 (552) 10月。(※稲目が仏教を受容して) 後に、国に疫氣 (えきやみ) 行 (おこ) りて、民、天殘 (あからしまにしぬる) ことを致す。久して愈 (いよいよ) 多し、治療すること能はず。

「天然痘」流行の原因は「倭国」の朝鮮半島・高句麗遠征

6世紀中国では、南朝梁 (502～557) の滅亡後、陳 (557～589) ・後梁 (554～587) ・北齊 (550～577) ・北周 (556～581) などが乱立し抗争する。中国の干渉の弱まった朝鮮半島では、高句麗・百濟・新羅が覇を競って互いに合従・抗争を繰り広げ、半島南部に「任那諸国」といわれる領国を有していた「倭国」は、いやおうなしに、この抗争に巻き込まれ、半島深くまで出兵していく。**⇒半島に出兵し戦った「倭国」とは何か？ 史書では「ヤマトの王家」ではなかった**



「天然痘」流行前に九州の勢力の高句麗出兵があった

倭国は百済を支援し高句麗・新羅と戦う

高句麗は欽明7年（546）の陽原王即位以降南進し百済・新羅を脅す。百済聖明王は欽明12年（551）に新羅と共に高句麗を討つが、新羅は欽明14年（553）に、高句麗と結んで百済を攻める。そして倭国は百済を支援し、半島に度々大軍を派遣し高句麗・新羅と戦う。

半島での対高句麗・新羅戦で記録されるのは「筑紫・九州」の勢力

①「筑紫の内臣」が軍船団を率いて出兵

欽明15年（554）に百済は筑紫の内臣らに対新羅支援を要請し、支援のため「筑紫の内臣」は「助けの軍、数一千・馬一百匹・船四〇隻」の舟師を率い出兵。②「筑斯物部」莫奇委沙奇（まがわさか）が函山（かむむれ）城落城に貢献

12月に戦地で火箭で戦い函山（かむむれ）城落城に貢献したのが「筑斯物部」莫奇委沙奇（まがわさか）。

③「竹紫の嶋の上の諸の軍士（いくさ）」「筑紫国造」鞍橋君（くらぢのきみ）が活躍

高句麗・新羅の連合軍と戦うため「竹紫の嶋の上の諸の軍士（いくさ）」が派遣され、その戦闘で聖明王は新羅によって殺されるが、その際活躍するのが「筑紫国造」鞍橋君（くらぢのきみ）。

◆欽明15年（554）正月。畏き天皇の詔を奉りて、筑紫に來詣（まう）でて、賜へる軍を看送くらむ。内臣答報（こた）へて曰く、「即ち助けの軍數一千・馬一百匹・船卅隻を遣しむ。5月、内臣舟師を率いて百済に詣（い）たる。6月。能く射る人・筑紫国造といふもの有り。進みて弓を彎（ひ）き、占擬（さしま）かなひて新羅の騎卒の最も勇壯なる者を射落す。發（はな）つ箭の利（と）きこと、乗れる鞍橋（くらぼね）の前後を通（いとおし）て、其の被甲（よろひ）の領會（くび）に及ぶ。・・尊び名付けて鞍橋《矩羅膩（くらぢ）》の君と曰ふ。12月。函山城（かむむれのさし）を攻む。有至臣（内臣）が將（あ）て來たる所の民、筑斯物部莫奇委沙奇、能く火箭を射る。天皇の威靈を蒙りて、以月九日酉時（いふべ）を以て、城（函山城）を焚（や）きて抜きとりつ。



（鞍橋君は今も福岡県鞍手郡鞍手町長谷飯森山の鞍橋神社に祀られている。）

「天然痘」流行前に九州の勢力の高句麗出兵があった

「筑紫火の君」が百済王子恵を半島に送り威徳王として即位させる

④百済王子を「筑紫火の君」が「筑紫国の舟師」で送る 欽明17年（556）には百済王子恵を 筑紫国の舟師」や「筑紫火の君」が本国に送る。◆欽明17年（556）正月。阿倍臣・佐伯連・播磨直を遣して、筑紫国の舟師を率て、（百済王子恵を）衛（まも）り送りて国に達らしむ。別に筑紫火君《百済本記に云はく「筑紫の君の兄、火中君の弟。」といふ》を遣して、勇士一千を率（あ）て彌弓（みて）に衛り送らしむ。（*557年に恵は即位し威徳王となる）

*「筑紫の君」は磐井や葛子、白村江で唐の捕虜となった薩夜麻の称号。「火の君」の「火」は「筑紫・豊・火」という磐井の版図で「肥前・肥後」を指す地域。

⑤高句麗人が筑紫に帰順 欽明26年（565）高麗人頭霧唎耶陞（づむりやへ）等が「筑紫」に投化。

6世紀半ばに大伴狭手彦が高句麗宮城を攻略

欽明23年（562）8月*大伴狭手彦が百済と共に高句麗を討伐し、宮城（平壤）深く進攻し王を追い、多大な戦利品を獲得（*実際は一本の11年で551年が正しい）

◆欽明23年（562）八月、天皇、大將軍大伴の連狭手彦を遣して、兵数万を領めて、高麗を伐たしむ。狭手彦、乃ち百済の計を用て、高麗を打ち破りつ。其の王墻（かき）を踰（こ）えて逃ぐ。狭手彦、遂に勝に乗りて宮に入り、尽に珍宝貨賂（たからもの）・七織帳（ななえのおりもの）とばかり）・鉄屋（くろがねのいへ）を得て還来（まうけ）り。旧本に云はく「鉄屋は高麗の西の高樓上に在り」（略）鉄屋は長安寺に在り。是の寺、何れの国に在りといふことを知らず。一本（あるほん）に云はく「十一年（550）、大伴の狭手彦の連、百済国と共に、高麗の王陽香（ようこう）を比津留都（ひしるつ）に驅（お）ひ却（しりぞ）くといふ。」



「天然痘」流行前に九州の勢力の高句麗出兵があった

大伴狭手彦は松浦湾から出征していった

松浦佐用姫は大伴連狭手彦との別れを嘆き、佐賀唐津湾岸の鏡山の頂上で領巾を振り続けた。それでも嘆きは尽きず呼子まで行き、7日7晩泣き明かし、遂に石になったという。万葉集や肥前国風土記にも取り上げられ能楽にもなっている。

871大伴佐提比古の郎子（いらつこ）、特に朝命を被り、使を蕃国に奉（うけたまは）る。艤棹（ふなよそひ）して言（こと）に帰（ゆ）き、稍に蒼波に赴く。妾（をみなめ）松浦〔佐用比売〕、この別るの易きを嗟（なげ）き、彼（そ）の会ふの難きを嘆く。即ち高山の嶺に登りて、遙かに離れ去く船を望み、悵然（うら）みて肝を断ち、黯然（いた）みて魂を銷（け）す。遂に領布（ひれ）を脱ぎて麾（ふ）る。傍の者涕を流さずといふこと莫し。これに困りてこの山を号けて領巾麾（ひれふり）の嶺と曰ふ。

◆遠つ人 松浦佐用姫 夫恋ひに 領巾振りしより 負へる山の名
872山の名と 言ひ継げとかも 佐用姫が この山の上（へ）に 領布を振りけむ



鉄屋の長安寺は筑紫にあった

「何れの国に在りといふことを知らず」というが・・・

『太宰管内志』筑前二十。上座（かみつあさくら）郡朝鞍寺（略）「昔この朝倉神社の社僧の坊に朝倉山長安寺とて天台宗の寺院此の郡の山田村にありしと云。いつの比に亡びたるにや、すべてさだかなる事はしりがたし。」

ヤマトから派遣されたなら、ヤマトの長安寺にあって然るべきだが、そのような寺は存在せず『書紀』編者は「どこにあるか」知らなかった。松浦湾から出征した狭手彦が九州の将軍なら持ち帰った「鉄屋」が筑紫の寺に安置されているのは極めて自然の事。



「聖徳太子」は天然痘の大流行の中で誕生した

「聖徳太子」の誕生年は天然痘の蔓延した九州年号「金光3年（572）」

『聖徳太子伝記』聖徳太子ノ御誕生之時代ヲ上古ニ相尋侍レバ年号ハ金光三年壬辰（572）歳也

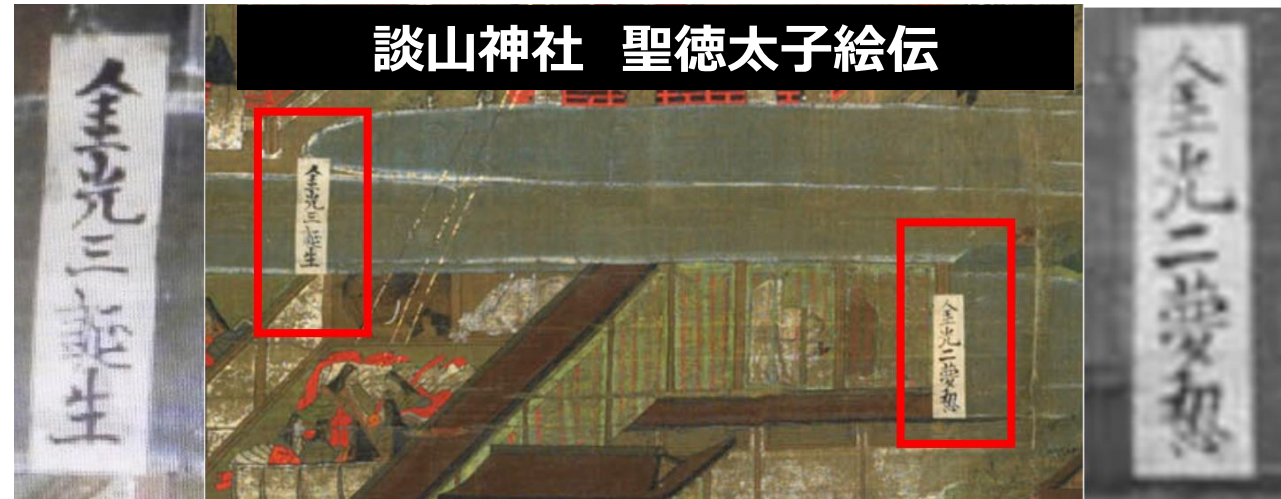
*「金光」は大和朝廷の大寶建元（701）以前に存在した「九州年号」といわれる年号の一つで570年～575年まで。

- ①『善光寺縁起』に「金光元年（570）庚寅歳天下皆熱病」と熱病が蔓延したことが記されている。
- ②福岡県の「五社稲荷」（嘉麻市上山田下宮）由緒に、「金寶2年」に倭建命が、疫病が蔓延し多くの人が苦しみ死ぬ様を見て、伊勢神宮から勧請されたとあるが倭建命時代に元号や伊勢神宮があるはずもなく「金光2年」の誤伝で「熱病」の蔓延を記すもの。

聖徳太子の生涯が572年～622年まで九州年号で記される（『聖徳太子伝記』『聖法輪蔵』『聖徳太子伝』『聖徳太子絵伝』など）

『聖徳太子伝記』太子十六歳御時、守屋御合戦事勝照三年（587）太子十七歳御時、勝照四年戊申（588）太子廿二歳御時年号ハ端政五年癸丑（593）春ノ比。◎太子十八歳（己酉・589年＝九州年号「端政元年」）御時、春正月参内して国政を執行（*即位）したまへり。「端」は「始め」、「政」は「政治」で、「端政」は「政治の始め＝即位」の意味。太子の即位年は589年・九州年号端政元年にあたる。（『書紀』では崇峻2年で厩戸の「立太子（593）」と合わない。また崇峻の即位年でもない。）

『聖法輪蔵』○太子五歳 年号ハ賢称元年丙申（576）
○太子九歳御時 年号鏡常元年庚子（580）*鏡常（当）
元年は辛丑（581）○太子二十三歳、年号吉貴元年甲寅
（594）○太子三十八御歳 年号定居元年己巳
（609）*定居元年は辛未（611）○是太子四十六御歳
年号ハ倭京二年丁丑（617）*倭京二年は己卯（619）
『聖徳太子伝』（万徳寺蔵）○推古天皇拾年〔太子卅一
歳〕願轉四年壬戌（602）*願轉四年は甲子（604）



大和朝廷の「大宝建元」以前に存在した「九州年号」

『記・紀』以外の様々な記録に700年以前の年号が

1継体 5 丁酉 517～521	17端政 5 己酉 589～593
2善記 4 壬寅 522～525	18告貴 7 甲寅 594～600
3正和 5 丙午 526～530	19願転 4 辛酉 601～604
4教倒 5 辛亥 531～535	20光元 6 乙丑 605～610
5僧聴 5 丙辰 536～540	21定居 7 辛未 611～617
6明要 11 辛酉 541～551	22倭京 5 戊寅 618～622
7貴楽 2 壬申 552～553	23仁王12 癸未 623～634
8法清 4 甲戌 554～557	24僧要 5 乙未 635～639
9兄弟 6* 戊寅 558～558	25命長 7 庚子 640～646
10蔵和 5 己卯 559～563	26常色 5 丁未 647～651
11師安 1 甲申 564～564	27白雉 9 壬子 652～660
12和僧 5 乙酉 565～569	28白鳳 23 辛酉 661～683
13金光 6 庚寅 570～575	29朱雀 2 甲申 684～685
14賢称 5 丙申 576～580	30朱鳥 9 丙戌 686～694
15鏡當 4 辛丑 581～584	31大化 6 乙未 695～700
16勝照 4 乙巳 585～588	

『二中歴』による。*の6は1の誤り

赤杵は「聖徳太子」の時代

『襲国偽潜考』 繼體天皇十六年、武王年を建て善記といふ、是九州年号のはじめなり、年號 けだし善記より大長にいたりて、およそ一百七十七年、其間年號連綿たり、麗氣記私抄、また海東諸國記などにもこれを載せ、今伊豫國の温泉銘にも用ひ、如是院年代記にも朱書して出せり

『二中歴』（平安末〜鎌倉初期）『如是院年代記』（十六世紀後半）『日本帝皇年代記』（薩摩入来院家文書。年代不詳）『帝王編年記』（十四世紀）『扶桑略記』（皇円著とも。一〇九四）『和漢年契』（高安蘆屋。一七八九）『襲国偽潜考』（鶴峯戊申。一七八八〜一八五九）『玉勝間』『平家物語』『吾妻鏡』等我が国の古文書、『海東諸國記』（申叔舟。一四七二）『日本大文典』（シヨアン・ロドリゲス。一六〇四〜一六〇八）等の海外資料、大和朝廷の正史『続日本紀』（七二四年の聖武天皇の詔報）、法令の『類聚三代格』（平安時代）。明治政府編集の辞典『古事類苑』（歳時部四、年號下、逸年號）。その他『聖徳太子傳記』『宇佐八幡文書』『善光寺文書』『開聞故事縁起』『伊予三島縁起』『江ノ島縁起絵巻』ほか寺社等の縁起に多数。

九州年号は517年から大化6年（700）まで連続した。701年に大和朝廷は「大宝」を「建元」。建元はその王朝の最初の年号を示す。「聖徳太子」の生涯を記した九州年号は「ヤマトの王家（大和朝廷）」の年号ではなかった。

後の世に「聖徳太子」とされたのは誰か

通常「聖徳太子」とは「厩戸皇子」で、593～621まで推古天皇の摂政として「悉くの政」を行い、仏教を振興、冠位12階を定め、17条憲法を制定、法隆寺釈迦三尊像のモデルとなり、『隋書』で煬帝に「日出る処の天子」を名乗って使者を送ったとされる。

◆用明元年（586）春正月壬子朔、穴穂部間人皇女を立てて皇后とす。是四男を生む。其一を厩戸皇子と曰す。◆**推古元年（593）**夏4月に厩戸豊聰耳皇子（うまやどとよとみみのみこ）を立てて、皇太子とす。仍りて録（つづさ）に政を摂（つかさど）らしむ。**万機悉く委ぬ（年が『伝記』と異なる）推古29年（621）2月5日に薨去**

とよとみみ
（耳が聡
い）←10人
の話を聞き分
ける



厩戸皇子は日出る処の天子ではない

『隋書』の日出る処の天子は九州の「多利思北孤」

◆『隋書』倭（倭）国伝。開皇20年（600）**倭王、姓は阿每、字は多利思北孤、阿輩雞彌（あはきみ）と号す。使を遣わし闕（けつ）に詣でる。**（略）**王の妻は雞彌と号し、後宮に女六七百人有り。太子の名を利歌彌多弗利とす。（*「利、歌彌多弗の利なり」とも）**

⇒**倭王は「男」で推古ではない。厩戸は「天子」を名乗ったことは無く「倭王（天皇）」でもない。「阿每」という姓、多利思北孤という字もなく、「雞彌」という妻や「利歌彌多弗利」という太子もない（嫡子は山背大兄王）。万機を総覧したのは多利思北孤**

◆大業3年（607）**其の王多利思北孤、使を遣し朝貢す。使者曰はく、「海西の菩薩天子、重ねて佛法を興すと聞く。故に遣して朝拜せしめ、兼ねて沙門数十人、来らせ佛法を学ばす」といふ。其の國書に曰はく、「日出ずる處の天子、書を日没する處の天子に致す。恙無きや云云」と。**

⇒**「日出ずる處の菩薩天子」を名乗り「仏法を興した」倭王は多利思北孤**

⇒**冠位12階も多利思北孤の事績**◆内官に十二等有り。一に曰く大德、次を小德、次を大仁、次を小仁、次を大義、次を小義、次を大禮、次を小禮、次を大智、次を小智、次を大信、次を小信。

倭国は「阿蘇山があり、気候温暖で水多く陸少ない」九州の国

◆『隋書』氣候温暖にして、草木は冬も青し。土地は膏腴にして水多く陸少し（略）阿蘇山有り。其の石、故無くして火起り天に接する者、俗以て異と為し、因って禱祭を行う



九州の多利思北孤は我が国の代表者で全土を統治

年号を建てうるのは一国の最高権力者（天子）

九州年号を建てた勢力は我が国の代表者

年号（元号）は一国の支配者（天子）が「時代に名前を付けその支配を明らかにする手段」で支配に服するものはその使用を義務付けられる。これを「正朔を奉じる」といい、前漢の武帝に始まるとされる。



『隋書』で九州の多利思北孤は我が国の代表者とされる

『隋書』で九州の多利思北孤は、中国の史書に見える、1世紀に金印（志賀島の金印）を下賜された倭奴国王、3世紀の邪馬壹国の倭弥呼・壹與、5世紀の「倭の五王（讃、珍、済、興、武）」など、歴代中国と交流した王を継ぐ我が国の代表者とされる。

◆『隋書』（日出る処の天子多利思北孤の国は）漢の光武の時、使を遣して入朝す。自ら大夫と稱す（略）魏より齊・梁に至り代々中国に相通ず。

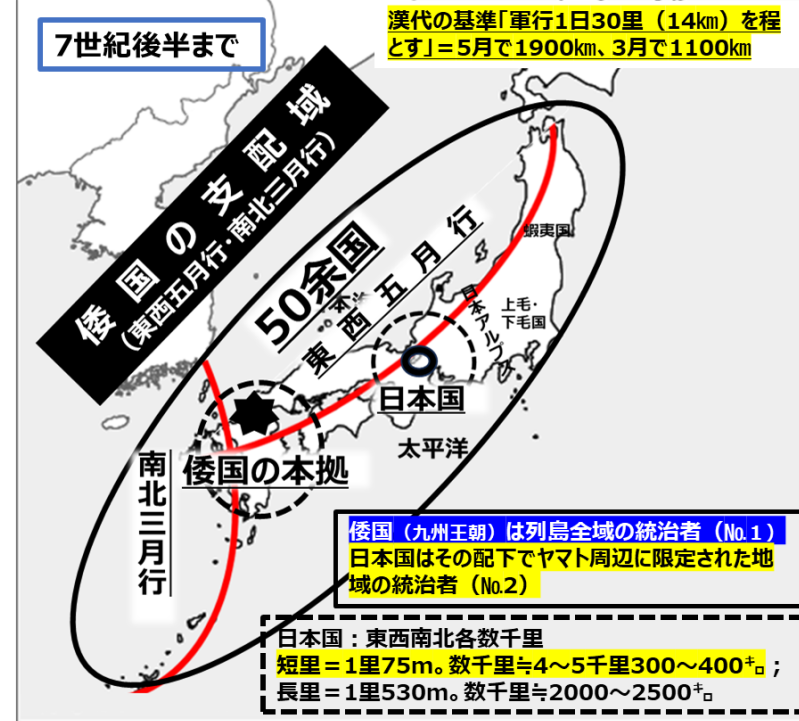
『旧唐書』の証言一倭国（九州の多利思北孤の国・九州王朝）と日本国（ヤマトの王家）

全土を統治した多利思北孤・その下でヤマトを中心に統治したヤマトの王家

・倭国は古の「倭奴国」なり。京師（長安）を去る一萬四千里、新羅の東南大海の中に在り、山島に依りて居す。東西五月行、南北三月行。世々中国と通ず。四面小島。50余国、皆付属す。⇒多利思北孤の倭（倭）国は全国を統治範囲に収めていた。

・日本国は、倭国の別種なり。（略）あるいは云う、日本はもと小国にして倭国の地をあわせたり、と。その人朝に入る者、多くは自ら大なるをおごり、実を以って対せず、故に中国はこれを疑ふ。また云う、その国界は東西南北各数千里西界と南界は大海にいたり、東界と北界には大山ありて限りとなす。山外はすなわち毛人の国なり。

『旧唐書』に記す「倭国」と日本国の領域



法隆寺釈迦三尊像の「上宮法皇」も「多利思北孤」

法隆寺釈迦三尊像の「上宮法皇」も厩戸ではなく阿每多利思北孤

法隆寺釈迦三尊像の光背銘文には「法興年号」とともに「上宮法皇」の登遐や母・妻の逝去が記されているが、これらは厩戸皇子と合わない。

①「上宮法皇」の登遐は「法興32年（622）」で『書紀』に記す厩戸の逝去（621年2月2月22日5日）とあわない。

②「法興」年号は天皇家に無く、多利思北孤の「佛法を興す」を略したもの。

◆『隋書』大業3年（607）其の王多利思北孤、使を遣し朝貢す。使者曰はく、「海西の菩薩天子、重ねて佛法を興すと聞く。」

③「上宮法皇」の母は「鬼前太后（きせんたいこう）」妻は「干食王后（かんじきおうごう）」で、厩戸皇子の母は「穴穗部間人皇女」、『書紀』に記す後は「菟道貝蛸皇女」で名前も異なる。

①通説で「鬼前太后（きせんたいこう）」とする厩戸の母穴穗部間人皇女には「鬼前」の名はないので、通説では「キサキ」と読む。しかし「キサキの太后」という呼称は無い。

②干食王后（かんじきおうごう）は、『書紀』で厩戸の後は敏達天皇と後の推古天皇の娘「菟道貝蛸皇女」だが「干食」の名はない。そこで「干食」を「かしはで」と読み、10世紀に成立した「聖徳太子伝暦」に「妃とした」とある「膳大娘」を「膳部（かしはべ）傾子臣の女菩岐々美郎女（ほききみのいらつめ）」と推測したもの。「王后（皇后）」と特筆するには4妃中最も出自が低いなど信頼性は薄い。①菟道貝蛸皇女（敏達天皇と推古天皇の皇女）②橘大郎女（推古天皇の孫）③刀自古郎女（蘇我馬子の娘）④膳部菩岐々美郎女（膳傾子の娘）

法隆寺は天智9年「一屋余るところ無く焼失」しており、三尊像は後に搬入された

◆『書紀』天智9年（670）夏4月壬申（30日）夜半之後（あかつき）に、法隆寺に災（ひつけ）り、一屋も余るところ無し。（*三尊像は422kg）

三尊像のモデルが「厩戸でなく多利思北孤」であれば登遐年や法興年号、母や妃の名が厩戸と合わないのは当然



法興元年（622）
前太后崩明年（623）
皇枕病弗愈干食王后仍以勞疾並
著於床時王后王子等及諸臣深
懷愁毒共相發願仰依三寶當造
像尺寸王身蒙此願力轉病延壽
住世間若是定業以背世者往登
土早昇妙果二月廿一日癸酉王
即世翌日法皇登遐癸未年三月
如願敬造釋迦尊像并侍及莊嚴
具竟乘斯微福信道知識現在安
出生入死隨奉三主紹隆三寶遂
彼岸普遍六道法界含識得脫苦
同趣菩提使司馬鞍首止利仏師造
(1)推古九年(622)(2)推古三十年
(六三三)(3)推古三十一年(六三三)

法隆寺釈迦三尊像の光背銘文

法興元州一年⁽¹⁾歲次辛巳十二月鬼
前太后崩明年⁽²⁾正月廿二日上宮法
皇枕病弗愈干食王后仍以勞疾並
著於床時王后王子等及與諸臣深
懷愁毒共相發願仰依三寶當造釋
像尺寸王身蒙此願力轉病延壽安
住世間若是定業以背世者往登淨
土早昇妙果二月廿一日癸酉王后
即世翌日法皇登遐癸未年⁽³⁾三月中
如願敬造釋迦尊像并挾侍及莊嚴
具竟乘斯微福信道知識現在安穩
出生入死隨奉三主紹隆三寶遂共
彼岸普遍六道法界含識得脫苦緣
同趣菩提使司馬鞍首止利仏師造

(1)推古二九年(六二一) (2)推古三十年
(六二二) (3)推古三十一年(六二三)

*九州年号に「願転(601~604)」。

これは光背銘の「願力転病」の略。『聖徳太子伝記』太子18才(己酉・589年=九州年号「端政元年」)春正月参内して国政を執行したまへり。「端」は「始め」、「政」は「政治」で、「端政」は「政治の始め=即位」の意味。

法興の元(がん)より三十一年、歳(ほし)は辛巳に次(や)どる十二月、鬼前太后、崩ず。明年正月二十二日、上宮法皇、病に枕し、愈(こころよ)からず。干食王后、よりて勞疾(いたつき)を以て、ならびに床に著(つ)きたまふ。時に王后・王子等、及び諸臣と與(とも)に、深く愁毒を懷(いだ)きて、共に相ひ發願す。仰ぎて三宝に依りて、当(まさ)に釈像の尺寸王身なるを造るべし。此の願力を蒙(こうむ)り、病を転じ壽(よわい)を延し、世間に安住す。若(も)し是れ定業にして、以て世に背かば、往(ゆ)きて浄土に登り、早く妙果に昇らむことを。二月二十一日癸酉の日、王后即世す。翌日法皇登遐す。癸未年の三月中、願の如く敬(つつし)みて釈迦の尊像ならびに挾侍、及び莊嚴の具を造り竟(おわり)ぬ。斯(こ)の微福(みふく)に乗(より)、信道の知識、現在には安隱(あんゐ)にして、生を出でて死に入らば、三主に随ひ奉り、三宝を紹隆して、共に彼岸を遂げ、六道に普遍する法界の含識も、苦縁を脱することを得て、同じく菩提に趣(おもむ)かむ。司馬鞍首止利(しばくわつくりのおぶとり)仏師をして造らしむ。

釈迦三尊像光背銘の「鬼前太后・干食王后」は「天然痘の苦役」を表す

鬼前太后、干食王后、上宮法皇の相次ぐ逝去は「天然痘」を示す

鬼前太后は621年12月、干食王后は翌年2月21日、法皇は22日と短期間に逝去。**これは当時猖獗を極めた「天然痘」が原因と思われる。**

天然痘の苦しみは仏典に記す「地獄」の苦しみと一致

◆『書紀』敏達14年（585）3月。又瘡発でて死（みまか）る者、国に充盈（み）てり。其の瘡を患む者言はく、『身、焼かれ、打たれ、摧（くだ）かれるが如し』といひて、啼泣（いさ）ちつつ死る。

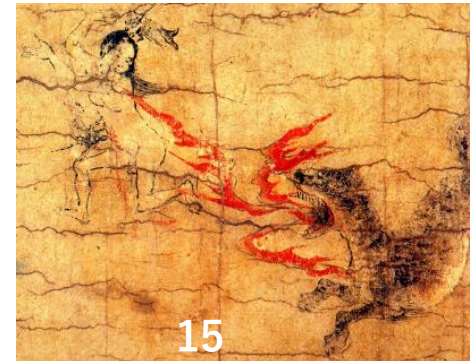
仏教では、人は生前の悪行に応じて「八大地獄」と、そこに付随する十六の「小地獄」に落ちて罰を受けるとされ、『**正法念処経**』（北魏～東魏の擢曇般若流支が538～542年に漢訳）**地獄品**には各地獄に落ち餓鬼となった罪人が「天然痘の苦痛」と全く同じような筆舌に尽くしがたい苦痛を受けるさまが描かれ、その姿を通じ、悪行を戒める記述がある。そして、その中に「鬼前・干食」の語が見られる。

干食は野干に食われる苦役

『**正法念処経**』など仏典に「干食・鬼前」

①干食（巻第七。八大地獄第四叫喚地獄）「身を壊ち命終れば、悪処、叫喚地獄髪火流処に堕ち、大苦悩を受く。謂所は火の雨ふり、彼の地獄の人、常に焼き煮らる。炎は頭髮を燃す。乃ち脚足に至れば、熱鉄の狗有りて、其の足を噉（くら）い食う。炎の嘴の鉄鷲は、其の髑髏を破り其の脳を飲む。**熱鉄の野干其の身中を食う（「熱鉄野干食其身中」）。**是れ常に焼かれるが如く、是れ常に食われるが如し。

*その他無間地獄中第四地獄「野干吼処（やかんこうしよ）」の苦に**「野干食其舌・野干食其鼻・野干食胸骨」**等とある



「多利思北孤の崩御・鬼前太后・干食王后」と天然痘

鬼前太后の由来も地獄の苦役

②鬼前（巻第十六餓鬼品第四）諸の餓鬼の前身（「餓'鬼前'身」）の罪として、「腹中に火起き、其の身を焚焼す。（略）地には棘刺生じ、皆悉く火燃し、其の両足を貫く。苦痛忍び難し」などといった罰を受けるとする。

鬼前・干食は天然痘の苦役地獄から救済を求めるために太后・王后に与えられた「法諱（戒名）」

釈迦は法華経で悪人成仏を説き、無限地獄の者も救い上げると約す。地獄の苦悩と同様の天然痘の苦しみの中で死んだ太后・王后に、鬼前・干食という無間地獄に堕ちた者を表す「法諱（戒名）」を受け、「釈迦となった多利思北孤」による苦役からの救済と成仏を願ったもの、つまり「鬼前・干食」は、多利思北孤による「救済」を願ってつけられた戒名だと考えられよう。

法隆寺釈迦三尊像の脇侍も天然痘での病死を示す

「女人往生」について善光寺縁起では皇極も地獄に落ちた後救われている

通常釈迦三尊像の脇侍は「文殊菩薩と普賢菩薩」のところ、「法隆寺釈迦三尊像」の脇侍は薬王菩薩と薬上菩薩。これは鬼前太后、干食王后の姿を模したもので、滅して後、中尊像の釈迦如来となった法皇多利思北孤により地獄の苦悩から救済され、いまや菩薩として世の人々を病苦から救わんとしている姿を現していることになろう。そう考えれば「釈迦三尊像の姿」とその「銘文」、「法皇・鬼前・干食の語」が一体のものとしてよく理解できる。



「聖徳太子」とされる隋に使者を送り「日出る処の菩薩天子」を自称し、仏法を興し、釈迦三尊のモデルとなったのはヤマトの厩戸ではなく、『隋書』に記す九州の阿每多利思北孤だった。彼は金光3年（572）に生まれ法興32年（622）に天然痘で登遐した。母の鬼前太后・妻の干食王后も共に天然痘で死去したが、没後は往生し如来・薬王菩薩・薬上菩薩となり苦痛から解放され、釈迦三尊像として世の人々の病苦からの救済を目指している。 16

天然痘は我が国の古代史を大きく変えた

わが国に天然痘を流入させた九州の勢力（九州王朝）の高句麗出兵

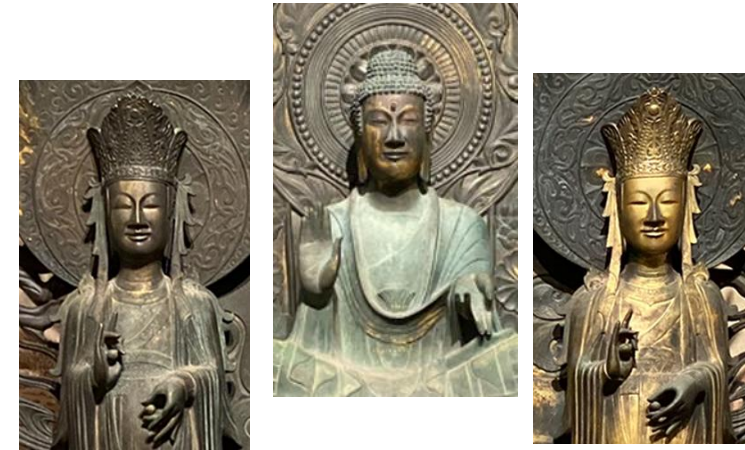
6世紀の九州王朝は百済を支援し高句麗・新羅と激しく争い、550年頃には半島深く高句麗の王城にまで侵攻していた。ところがその6世紀前半には中国から半島に「天然痘」が流入してきていた。兵士たちは長期間行動を共にし、かつ不衛生な状況に置かれていたことは疑えず、天然痘は瞬く間に九州に齎されたことになろう。それは「建武中（494～497）に南陽を撃ちし虜より所得（え）る、仍ち虜瘡と呼ぶ。」とあるように、大陸で齊と北魏の戦中に天然痘が流入したのと同じ状況だった。

天然痘は我が国の政治体制を一変させた

8世紀の天然痘の流行は藤原氏専制を覆したが、6世紀の流行は仏教信仰を根付かせ、倭（倭）国（九州王朝）の多利思北孤による宗政一致の統治を導いた。蘇我・物部戦争も大寺院の建立・仏像の造立も天然痘が齎したものと言える。

仏教も多利思北孤を救えなかった

しかし篤く仏教に帰依した聖徳太子のモデルの多利思北孤やその母・后も天然痘の病苦から逃れることは出来なかった。鬼前太后、干食王後の名はこのことを表していた。法隆寺釈迦三尊像は多利思北孤が如来となり、太后・王后は薬王・薬上菩薩となって、それぞれ天然痘の苦痛苦しみを逃れ、また天然痘から衆生を救うことを願い造立されたものといえよう。



法隆寺釈迦三尊像（スーパークローン文化財・東京芸術大学2017年制作）

ご清聴有難うございました

